

登山紀行

・佐幌岳登山

退職後移住したこの鹿追の地は、東大雪と呼ばれ北海道の屋根、大雪山系の東に広がる山岳高原(海拔二百六米)にある。

山登りの経験は、私の記憶の中にもこの六十数年はなかった。毎日、北の方向には然別湖周辺および糠平湖周辺の著名な山が見え、空気の乾燥する秋から冬にかけては、南の方向に、日高山脈が屏風のように見える。

そんな山を見るにつけ、自然と山に登ってみたいと思うようになったが、経験のなさもあり山行を躊躇していたのであるが、平成二十年六月に、然別ネイチャーセンターの主催で、東雲湖(しのめこ)：然別湖畔沿いの遊歩道を歩く。往復三時間程度で高低差なしへの自然散策のあることを知った。早速申込をし、軽いハイキングのつもりで参加し

た。

湖畔沿いに進むので、ほとんど高低差はないものの、木の根、岩、倒木などで起伏は頻繁にやってくる。ネイチャーセンターの案内なので、その速度は比較的ゆっくりで時々、動植物や地形の説明や花々の説明などがあるので、写真を撮ったりしながらの散歩といった感覚であった。しかし、山登りの第一歩としては非常に良い経験であった。また、休みながらの往復3時間ほどを大きなトラブルもなく歩き通せたことは、これからの山登りのスタートとして自信ともなった。

そんなことがあつてから、夏の暑い季節は、家庭菜園やジョギング、木工、ガーデニングと結構忙しく過ごしていたためか、登山の二文字は、頭に浮かんでこなかったが、九月になって比較的涼しくなってきたことや、空気が澄んで山がくっきりと見える様になると、なぜか無性に山登りが意識されるようになった。

そんな中で、秋晴れの九月二十九日(月)初登山を決行した。初登山は、冬の間いつも行っている佐幌岳である。

インターネットの登山に関するホームページなどを閲覧して、比較的楽に登れる山として紹介されていたので、軽い気持ちで行ってみることにしたのである。

佐幌岳は狩勝峠頂上のドライブイン脇から登る狩勝峠コースと、サホロスキー場から冬はスキーコースとなる登山道があるが、峠から登るコースを選択した。こちらの方が、距離が長く本格的登山コースである。

登山決行を決めて自宅を出発したが、午前十時ころであった。狩勝峠頂上には、十時三五分着。頂上のドライブインの駐車場に車を止め、トレッキングシューズにはき替え、身支度を整えて出発である。

狩勝峠駐車場から売店の右側、国道38号との間を十勝側へ向かっていくと、五十米程で佐幌岳登山口の表示と、入山届出用紙がおいであり記入する。すでに二組が入山しているようである。

いよいよ登山開始、十時四五分である。いきなり足場の悪い、すべりそうな急な登り口を登り切ると、登山道は二米ほどの幅に笹が刈られており、比較的なだらかで歩きやすい。

登り始めてほどなく、峠に続く国道の十勝側を見渡せる尾根に出る。天気もよく、暑いくらいで、急な登りが続くと汗がどっと吹き出て、息切れもする。どうもペースが速すぎるようである。時々、一息入れながらゆっくりと進む途中、マウンテンバイクの五人組に出くわす。

先に入山したグループのひとつのよう、マウンテンバイクで佐幌岳まで登り、下山の途中であった。この急斜面を自転車でも上り下りする様子にびっくり。確かにマウンテンバイクだから山登りにも使うのだろうか、初めて見るその熟練した技術に感心してしまった。

さらに急な斜面を上り下りして、十一時五十分途中の桜山へ到着する。桜山九百五十・五米の頂上標識がある。ここからは、十勝平野とこれから上る佐幌岳へ続く登山道が見通せる。

桜山から一旦下って佐幌岳直下に進む。ここまでは、木々や笹の登山道であったが、直下に取りつくと岩石がごろごろとした登山道となる。

両手を使って、岩の段差をやり過ぎること二十分。桜山から四十分

で頂上に到達する。登山開始から一時間四五分、一二時三十分には到達した。頂上には中年女性の四人グループが先着していた。

三百六十度の大パノラマを堪能する。北側の大雪山系は、冠雪しており、さらに美しい。東には、然別周辺の東西ヌプカウシヌプリ(地元では夫婦山)や南ペトウトル山、白雲山、天望山。遠くにはウペサンケやニベソツも遠望できるまさに絶景である。登山の醍醐味は登りきった後にある達成感とこの絶景を体感できるところにあるようだ。

先着のグループはもう下山のようである。頂上には自分一人である。持参したカメラにそれらの絶景を切り取る。それから十勝平野を見ながらゆっくり昼食をとり、贅沢な至福の時間を過ごす。

ちょうど一二時となったので下山することにする。下山は登りのような息切れや汗が噴き出すようなことはないが、足を踏み外したり、木や岩に足をとられると、大げがにもつながる。特に単独登山では注意が肝心である。

それでも、やはり一度歩いた道は安心感がある。登りは桜山から頂

上まで四十分かかったが、下りは三十分であった。桜山に着くと、先のグループが休憩中で、やはり中年女性ということもあり同じ距離を四分かかったとのこと。三〇分で降りてきたことを告げるとびっくりしていた。

グループの関係は深く聞かなかったが、京都二人、広島一人、札幌一人ということ、近年の登山ブームは、ここにもやってきていることを痛感する。

四人の記念撮影をという依頼で、桜山の頂上標識を背景にカメラのシャッターを押してやる。グループはようやく出発の準備に取り掛かるようだったので、先に桜山を降りる。

あれほど汗だくで頑張った上りも、下りは快調に歩が進む。結局桜山から五十分で登山口に到着する。佐幌岳頂上から下りの所要時間は一時間二十分であった。駐車場に着替えていると、先のグループが約十分遅れで、下山してきた。

こうして、初登山は大きな経験と達成感と大パノラマの歓迎を受け

て無事終了した。

・東ヌプカウシヌプリ登山

初登山の佐幌岳の経験をもとに、自宅周辺の山への登山を計画した。さてどこから登ろうかと考えた時、然別湖へ行く途中千畳崩れの向かい側に、いつも登山者の車が多く駐車しているのを目にしていたので、まず、東ヌプカウシヌプリを登ってみることにした。

十月五日(日) 快晴である。地元の山のよいところは、天候を見てから出発できることである。自宅からわずか二十分ほどで登山口駐車場に到着する。出発が遅れたので、登山口の入山届記載時間は十一時四十分であった。

登山口からは笹を漕いで、間もなく樹林帯に入ると共に、登山道は岩と木の根の急な登りとなる。佐幌に比べ登山道は決して登りやすいとは言えない。足を滑らせないように、しっかり足場を確保しながら慎重に上る。出発時間が遅かったせいもあって、途中で、下山して来る先

行入山者とすれ違う。しかし、三十分も上ると、稜線に出る。

東ヌプカウシヌプリの頂上へのこの稜線はなだらかで、登山道は岩から土の歩きやすい道となる。だらだらと十分も上ると頂上標識が突然現れ頂上となる。登り所要時間は四十分。頂上は標識のほかは何もなく、腰を下ろす岩もない。

頂上から見えるのは、士幌ヌプカの里方面の広々とした牧草地と、北側には、白雲山、岩石山、天望山などが見える。残念ながら然別湖は見えない。

頂上から南の方向へ若干笹を漕いで降りると、ナキウサギの生息するという岩場へ出るがその先は行き止まり。二十分ほど休んで下山する。道に迷うことはまずない。稜線から下りに入ると岩場が続く。登りに手こずったが、下山の際は足場を確認しながら、踏み外さないように注意する必要がある。下りの所要時間は二十分であった。

東ヌプカウシヌプリは、登山道の岩場を注意すれば、短時間で登ることができ、肝心の然別湖は見えないので、景観的にはいま一つの感

がした。

・白雲山、天望山、東雲湖周回トレッキング

登山3回目を選択したのは然別湖のトウマロから白雲山頂上、下つて湖畔分岐から天望山頂上、下つて東雲湖へ出る。その後湖畔遊歩道を通つてトウマロへと周回する四時間三十分はかかるという周回コースである。

十月五日に東ヌプカウシヌプリに登つてから一週間。十月十二日(月、体育の日)は天気もよく、何より体育の日なので急遽登山を決行することにした。

三回目の登山ということで、持ち物のチェックや、準備も早くなった。トウマロ駐車場には十時十五分に着いたが、オシヨロコマの釣り限定解禁中であることと、同じ白雲山への登山客も多く駐車場はほぼ満車状態。

道路沿いに車をとめ、トレッキングシューズをはき、笹漕ぎのための

オーバーズボンをはいて、登山口へ。すでに多くの登山者が入山している模様である。遠くは札幌や釧路からの登山客もいる。

十時二五分登山開始。湖畔に沿って東雲湖方面に進むとすぐに白雲山登山口分岐へ出る。今日は、周回コースなので白雲山へ向かう。険しさは東ヌプカほどではないが、時々木の根や岩の険しい登山道をジグザグに上っていく。木立の間からは然別湖が見え隠れするが、気を取られと足を踏み外すので、休憩以外は、わき見をしない方がよい。

三十分ほど登ると、白雲山の直下までの稜線に出る。稜線は下り気味に快適に進む。右手には東ヌプカ左手には湖が木立の間に見え隠れする。

白雲山直下からは、岩また岩の険しいルートとなる。一旦右側に迂回しながら、高度を上げていくと、ヌプカの里側からの登山道と合流しさらに、岩登りが続く。頂上が見え始めると、一定のルートはなく、思い思いのルートを選定しながら頂上を目指すが、ここはほんの五十米ほどですぐに頂上に達する。白雲山一一八六米。十一時十分頂上

到着。所要時間約四十分。

白雲山頂上は大きな岩がごろごろしていて、移動も容易ではない。しかし、ここから北側下に広がる然別湖のロイヤルブルーは目に鮮やかである。さらに糠平や土幌方面、遠くに大雪山系の山々が臨め、湖の周辺には東西ヌプカウシヌプリ、南ペトウトル山、天望山、岩石山などが取り囲んでいる。先客も多く全部で二十人ほどは居たであろうか。思い思いの場所を占有して頂上からの景観を堪能したり、カメラで記念撮影に余念がなかったり、昼食や飲み物をとっていたりしている。

後からも三々五々登山客が上ってくる。そんな訳で白雲山の頂上も込み合つて来たので、二十分位で下山することにする。

頂上標識の脇に天望山方面の道標があり、(道標といつても岩だらけでどこがルートか定かではないが)その方角へ下る。白雲山から登つてきた道を引き返すグループも多く、上りの途中で下山中の何組かすれちがったが、天望山方面に下るグループはあまり多くはない。

先に四人のグループが天望山方面へ向かったことは、頂上で休憩して

いたときに見かけたので、そのグループの後をたどることにする。かなり急な斜面を下っていくと二十分ほどで、湖畔と天望山の分岐標識のコル(山の尾根のくぼんでいる所)へ出た。丁度、先行のグループが天望山へのルートをたどっているのが見えたので、その後を進む。白雲山からの下りもそうであつたが、結構笹が深く足もとがよく見えないので、木の根や岩が隠れているとつまずくので、笹を両手でかき分けかき分け進む。

頂上までほぼ同じような傾斜の笹藪を漕いで進む。最初は山の右側へ回り込むように進み、右手に岩石山の頂上を見下ろす形になるが、やがて左に折れてしばらく進むと、途中から左手下に湖が見え出す。

湖畔分岐から三十分ほどで天望山頂上に着く。天望山への登山道に岩はなく、登山道も笹で視界が遮られる以外は登りやすい。

先行グループとはつかず離れずに登る。三五、六歳のご夫婦と同年代の女性及び六十歳位の男性の四人グループが先着していた。

天望山頂上は木があつて白雲山ほど眺望は利かないが、湖の青と遠

く大雪の冠雪した山々が素晴らしい景観を作り出している。天望山一七二米の頂上標識と一緒にカメラのシャッターを押してもらったり、四人での写真を撮ってあげたりする。

十分ほどで、東雲湖へ降りるという。自分は、先ほどの分岐まで下りて湖畔沿いに戻ることを考えていたのだが、そんなに遠くないですよ一緒にどうですか？と言われ同行させてもらうことにした。天望山からの下山開始は、たぶん十二時四十分頃と思う。天望山から東雲湖への下山コースは、やはり笹が多く、なれないと踏み跡を見失う。今回は初めてのコースで、経験のあるグループと一緒になのでその点は心強い。

途中東雲湖から天望山を目指す、逆ルートのグループに出会う。中高年のグループで、中に黒一点の82歳の男性が混じっていた。あとは全員五、六十代の女性十人ほどが休憩中であった。

三十分ほどで、登山道は笹藪から岩と木の根の凹凸の激しい道に代わる。それと同時に遠くに東雲湖が小さく望まれる。途中で小学生二人と両親の家族で出会う。十三時三十分を過ぎていた。これから天

望山に登り、分岐から湖畔に戻っても、十六時は過ぎるであろう。日暮れが早いこの季節のこと、少々心配であった。

天望山からおよそ一時間で東雲湖へ着く。十三時五十分であった。ここで昼食である。四人のグループは北伏古在住で、出身は関西のとこと。いつもこの四人で行動しているようだ。若い方の男性は、登山経験が豊富なようで、手慣れた様子でお湯を沸かし、コーヒーをふるまってくれた。また、漬物やお稲荷さんもごちそうになった。

自分は今年から山登りを始めたことや、この東大雪は多くの山があつてこれからまだまだ楽しめる所が多いということなどで盛り上がった。東雲湖から湖畔沿いのルートは、六月に一度来ていたので、ここから先は単独でも安心である。

昼食後このグループは東雲湖へ降りてみるようであったし、まだゆくりしている様子であったので、同行のお礼を言って一足先に帰途へつくことにした。十四時ちょうどであった。

六月に初めて参加したトレッキングで、結構木の根や岩の道が大変

だった記憶があるのだが、今日白雲山から天望山への周回コースをたどつて見ると、この湖畔沿いの高低差がほとんどないコースは、大変歩きやすくほとんど平地を歩く感覚であった。前回はおよそ一時間三十分はかかったと思うが、トウマロの登山口へ着いたのは十四時五十分であった。五十分の行程であった。

結局朝十時二五分に入山してから休憩もすべて含めて、約四時間三十分のトレッキングであった。

身近にこんな素晴らしい山があり、いつでも思い立った時に山歩きのできる幸せを感じつつ、帰途に着いた。

東大雪には、初中級者向けに適した山が数多くある。まずは然別湖周辺の山から始めて、糠平方面、大雪山系へとその範囲を広げていきたいと思う。冬山は、まだまだ先のことだが、登山経験を積むとともに、将来は山岳スキーにも挑戦してみたいと考えている。

了